

維新史回廊だより

明治150年記念号



第30号
2018年
7月発行
年2回発行

■編集 総合企画室
■発行 山口県観光スポーツ文化部文化振興課
(山口市滝町一一一 TEL 083-1933-1161(7))

維新史回廊だよりの第三〇回をお届けします。

「明治一五〇年」を迎えて、今回ば、毛利博物館館長代理の柴原直樹氏に、六月十六日（土）に山口県セミナーパークで開催された御講演（山口ひびきの郷王催「ヨロウヒものがたりセミナー前期〔第一回〕」）の内容をやさしく、激動の幕末長州藩主「毛利敬親」について、解説していただきました。

毛利家資料から見た毛利敬親

はじめに～毛利敬親は「名君」か～



「毛利敬親像」【毛利博物館蔵】
写真をもとに明治時代に描かれた写実的な肖像画

毛利敬親は、十三代の藩主として明治維新を主導しました。その功績により、死後は「忠正公」とよばれて、正一位を追贈され、野田神社の祭神となり、近代には神としてあがめ奉られました。

一転、戦後には「そつせん公」などと呼ばれます。それは事実かどうか定かでなく、明治期以降の行き過ぎた崇拜の否定・反動から生じた評価である可能性が高く、それを小説家などが面白いヒストリカルに取り上げたことから流布したものなのです。

しかし、いざれの評価にしても、歴史的に敬親の業績を正しく評価した

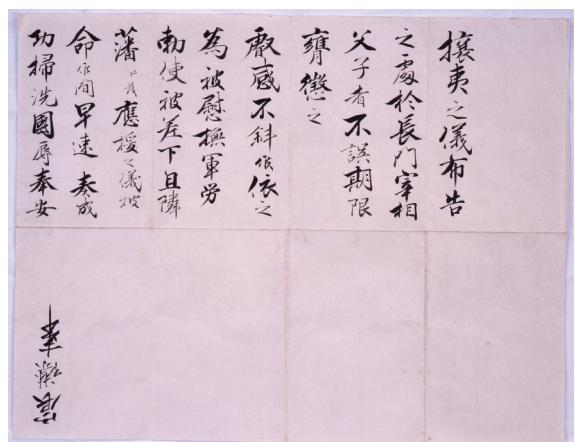
ものとは言えません。なぜなら「名君」しか「忠正」ではないのか。何をもって「名君」とかねのでしょ。 「名君」やしづか「忠正」像は、受け取る側によつて「もがほほ」作り上げられます。時代といつ縦軸によって評価は変化しません、特定の立場での横軸によつても変化する、かなり曖昧なもので、必ずしも「歴史的」評価とは言ふ難いものです。

むしろ、「名君」と云ふ言葉には、時代の限界すり超越し、超人的な偉業を成し遂げる響きもあります。「名君」として評価するにしても、まずは、時代といつ限られた条件の下で、その人が何をなし、何をなしえなかつたか、厳格に判断することは大切だと思われます。

では、「歴史的」に正確な評価を行つためには、どうすればよろしいのでしょうか。それは、同時代の適切な資料を、的確な方法で読み解き、合理的に分析する」ことが大切です。敬親の場合、残された美術工芸品に関しては、用いられた衣裳など、好みが反映されているとはいえるが多様で一定せられないと不適切といわざるを得ません。また、太刀など拝領の品は、そもそも敬親の功績を賞めるためのものですから、これもあまり適切とは言い難いものです。



「梨地菊桐紋蒔絵糸巻太刀拵」
(なじきくりもんまきえいとまきたちのこしらえ)
【毛利博物館蔵】
攘夷実現に向けての周旋の功を認めて、朝廷が敬親に下した太刀



「攘夷褒勅」(じょういのほううちょく)
【毛利博物館蔵】

全国で唯一攘夷を実行したことを賞した勅書

のはありません。ただこれも、
拝領の勅書などは、そもそも敬
親を称揚するためのものですか
ら、背景となる政治的事情を十
分に考慮できなければ、敬親の
実像を明らかにすることは難し
い史料といえます。

最も適しているものは、敬親
自身が作成した古文書です。し
かしこれも、たいていの場合は、
右筆と呼ばれる書記官が代筆し
ますが、秘書面にも相当するよ
うな有能な右筆の場合、周囲の情況を考慮しつつ、主君の意を忖度(そんたく)しながら
文章を作り上げてしまおうともあります。注意が必要です。

実は毛利家の場合、敬親をはじめとする歴代の当主は、一貫してこの時代には、自筆で文書を出します。これは、特に強い思い入れのある場合や、
人手を介した文章で命令を下さない時に、あえて用いるやうだと考え
られますので、この自筆の文書を検討することができる、最も敬親じこと人物を
知る近道ではないかと思ひます。

Q. 敬親は、どのような思いで藩主に就任したのでしょうか。

敬親が、藩主就任後の天保九年（一八三八）に初めて国入りする時に、
家臣団に与えた直筆の訓示があります。その「存じ寄りの家督せしめ、
当惑至極の事に候」と、思いがけなく家督を継ぎ、当惑してしまったと述べています。敬親は、前藩主毛利斉広の急死により、急遽家督を継ぎます
が、このことは敬親にとっても思ひがけないことでした。即位してしまったので

的是ありません。ただこれも、
拝領の勅書などは、そもそも敬
親を称揚するためのものですか
ら、背景となる政治的事情を十
分に考慮できなければ、敬親の
実像を明らかにすることは難し
い史料といえます。



「毛利齊広像」【毛利博物館蔵】
齊広の急死により、敬親は急遽
家督を継いだ

す。

やはり、幕府との交渉や、藩の重要な事、
毛利家の伝統などは、「先代の御直伝も
蒙(うなが)らう」「是もまだ藩主になる見込みのな
内」とこれまで藩主になる見込みのな
い部屋住みの身分であつたため、前藩主
の直伝もなにもまことに藩主となつたと、戸
惑ふを包み隠さず伝えています。

敬親は、文政十一年（一八一九）十一代藩主毛利斉元の長子として生まれましたが、本人も述べるところ、藩主になる見込みはほほ詫異だったた
でしよう。早々に萩に戻され、大名の子としての幕府や他大名との交際や、
やがて藩主になるための教育も受けないままに、成長したようですね。
経験不足を率直に認めながら敬親は、「若年不案内(なかがた)」一人の所存に任せ
せず、補佐の大臣の行つてこなすにあつて、親疎無く申し談
じ」と、若年で経験不足の自分一人で判断せず、補佐の大臣、すなわち家
老と分け隔てなく相談して政務にあたると決意を述べています。

敬親の家督相続は、齊広の急死に伴つ、緊急的な措置でした。本来なら
幕府が認めば、藩としての存続も危ぶまれるといふでしたが、この時期には幕府も規制を緩めたうしく、特例として認められたようですが、幕府に弱
みを握られた状態で藩主になつたことだけでも大変などいふ、当時の萩藩
は、三代の藩主が立て続けに立くなつたことから、藩政史上最も財政が悪
化していました。敬親は、この未曾有の困難の下で、充分な準備も決意
もないままに家を継がないはならなかつた事情を、率直に認め、家臣団
に全面的な協力を要請しているのです。

この訓示には、敬親の率直な人柄がよく現れています。また、混乱の中
で、問題を理路整然と理解し、まずは幕府対策、次いで財政再建と、何を
いつかべきか明確に示しておきます。その上で、独りよがりや貪欲を張るの

でなく、家臣の意見を聞き、その協力と補佐を得て困難を乗り切ると宣言してしますから、若年で経験不足とはいながり、思慮も分別もある人物だったように思われます。むしろこうなれば、家臣たちの意見をよく聞き、熟慮の上で用心深く事を運ぶのは、終生変わぬことになり、敬親の姿勢でした。

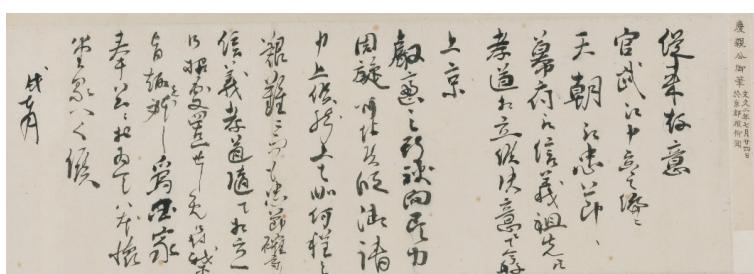
Q 敬親は、どのような藩を導いていったのでしょうか。

幕末の動乱を乗り切った敬親は、藩主として重大な決断を幾度も下しています。文久二年（一八六〇）七月の、公武合体から「攘夷」への藩是の転換もその一つでしょう。このときも敬親は、自筆で訓示を行っています。

それによると、これまで敬親は「天朝へ忠節、幕府へ信義、祖先へ孝道」の、三原則を両立させ、いわゆる藩是三大綱に従つて公武合体の周旋に努めてきたが、今後は「何程の難難にても忠節確守し、信義・孝道従いて相立ち候様処置せしめ」と宣言していきます。つまり、藩是三大綱の両立をやめ、朝廷への忠節を先ず実現させる方針に転換するのです。

実は、(二)ではまだ「攘夷」とは言っていないのですが、その後、朝廷と交渉することと、朝廷の真意が「即ち攘夷」と見抜いた萩藩は、幕府諸藩に先駆けて攘夷を強行するようになりました。

ただ、(二)で注意しておきたいのは、「信義」と「孝道」を捨てたわけではなく、後から実現せざる所述べてあります。



「毛利敬親御意書」【毛利博物館蔵】
「天朝へ忠節」を第一にすると宣言した敬親自筆の訓示

藩内での大激論を経て決定されたものでした。当然、三大綱の両立を主張する勢力や、幕府の力を重んじる立場も無視でやるものではありません。また敬親自身ですが、江戸時代の常識的な発想として染みついていた、家を守り、発展せしむ「孝道」は、なかなか簡単に投げ捨てられるようなものではありません。敬親は、やつした家臣への配慮も忘れないのです。そう考へると、このじめの訓示は、やや歯切れの悪い部分が見られるのですが、それは、敬親が藩の分裂を防ぎ、一丸となって「天朝へ忠節」を実現せらるための、苦心の跡と捉えることができるのです。

困難な状況下における政策の選択は、見方を変えるなりば、対立する勢力のどちらか一方を切り捨てる事です。下手をすると、藩の分裂につながりかねない難しい問題だと、敬親はよく理解していたのです。歯切れの悪さは、とにかく藩を分裂させず、一つの方向に向かわせるために、敬親が心を碎いた様子を示すものだと思われます。



柴原 直樹 氏

敬親の時代は、複雑な経済や、外国勢力も交えた混沌とした政局の中で、これまでになく難しい選択を迫られた時代でした。結果として敬親は、動乱を乗り切り、倒幕を成し遂げます。しかしそれは、最初から結末を見越してのことではありません。敬親自筆の文書からは、限られた選択肢の中から、周囲の情勢や国の力、家臣たちの意向を測りながら、最後の一歩を模索し続けた敬親の苦心が窺えられます。

その一手一手を、きちんと歴史的に評価するとして、敬親という人物の業績に歴史的に正確な評価をうながすことが、明治維新百五十年を迎えた私たちに課せられた課題ではないでしょうか。



激動の幕末
長州藩主
毛利
明治 150 年 記念 特別展
敬親

7/13 FRI → 8/26 SUN

【開館時間】9:00～17:00（入館は16:30まで）
※7/21(火)・8/1(水)・8/2(木)・8/23(金)・8/24(土)は16:00まで開館（入館は15:30まで）
【休館日】7月11(月)・16(土)・17(日)・18(月)・20(水)・21(木)・22(金)・23(土)・24(日)・25(月)
【観覧料】一般 1,300円（1,100円）・学生 1,100円（900円）
※シニア料金（70歳以上の方）：（中高生以下及び20歳以上の社会料金、並高生料金、中学生料金、特別支援学校生料金の各学年料金、障害者料金をもって貰うものと同額）
※シニア料金（70歳以上の方）：（中高生以下及び20歳以上の社会料金、並高生料金、中学生料金、特別支援学校生料金の各学年料金、障害者料金をもって貰うものと同額）
※シニア料金（70歳以上の方）：（中高生以下及び20歳以上の社会料金、並高生料金、中学生料金、特別支援学校生料金の各学年料金、障害者料金をもって貰うものと同額）
※シニア料金（70歳以上の方）：（中高生以下及び20歳以上の社会料金、並高生料金、中学生料金、特別支援学校生料金の各学年料金、障害者料金をもって貰うものと同額）
【特別協賛】山口銀行
<http://www.yma-web.jp>

山口県立美術館



明治改元から150年を迎へ 県内各地で様々な記念イベントが計画、開催されています。
その中から、パークロード周辺の県立施設で開催中のイベントを紹介します。

○ 山口県立山口博物館【山口市春田町3-1-2】
平成31年3月24日（日）まで

歴史常設展示／特集展示 明治維新と長州藩

● 一般 150円／学生100円

○ 山口県立美術館【山口市亀山町3-1-1】
明治150年記念 特別展 激動の幕末長州藩主 毛利敬親

● 料金は、常設展入館料に含む
● 12月24日（月・振休）まで

● 8月26日（日）まで
● 一般 1,300円（1,100円）
● 学生・70歳以上 1,100円（900円）

※18歳以下の方および高等学校、特別支援学校等に在籍の方、障害者手帳等をもつ持参の方などは無料。

○ 山口県立山口図書館【山口市後河原150-1】
企画画展（明治150年関連）

「ふるやま山口文学ギャラリー10周年記念展示
「ふるやまの文学とその時代～明治・大正篇～」

● 8月30日（木）まで ● 無料

○ 山口県文書館【山口市後河原150-1】
明治150年記念 資料小展示

文書館資料に見る幕末・明治の人・物・文化

● 通年開催 ● 無料

○ 山口県埋蔵文化財センター【山口市春田町3-2-2】
明治150年記念展示

維新前夜の山口県出土品にみる長州メソジュー
● 平成31年3月8日（金）まで ● 無料

維新史回廊だけではなく、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館等に置いています。
既刊印は、維新史回廊ホームページ（「維新史回廊だより」で検索）で御覧いただけます。